



バン格拉デシュに恋して

私たちにあまり馴染みのない南アジアの国、
バン格拉デシュを紹介します。

vol.7



【素晴らしい出会い①】

「あなたはバン格拉デシュ人ですか？貧しい国の人ですね？可哀想ですね…」私の友人のファルクバイは日本に留学していた時、会う日本人みんなにそう言われたそうです。僕は可哀想な人じゃないのに…彼は私が初めて出会ったバン格拉デシュ人で、その話を聞いたのは2週間の滞在を終えた帰国日の前夜。思いがけず涙が溢れました。バン格拉デシュでの毎日は本当に苛酷だったけれど、一体どれだけの人が私を助けてくれただろう…到着2日目に始まったホルタル(アモ)は60名以上の死者を出し交通もマヒしてしまっただけで通訳のファルクバイはいつも代替の乗り物、リキシャーとがりヤ

カーとかを用意してくれたし、知り合った大学生は私の拙いベンガル語にしっと耳を傾け勉強を教えてくださいました。農村で日射病になった時、私を自宅に招き看病してくれた女性の家には電気も水道もなかったけれど水を汲みに行き何度もタオルを替えてくれました。でも、そんな優しいバン格拉デシュの人達をちゃんと受け止めていなかった自分、優しくしてもらったのが当然と思ってしまった自分、バン格拉デシュに着いた翌日から日本へ帰る日を数えていた自分、私はファルクバイが留学時に会った日本人と同じでした。何をしにバン格拉デシュに来たのだろう…恥ずかしさと申し訳なさの中々涙は止まりませんでした。バン格拉デシュの人達に恩返しができるのはいつになるかわかりませんが感謝の気持ちは絶対忘れません。



ファルクバイ君(中央)



ダッカ大学の友人達



農村滞在中の調理風景

鶴田 素子さん

八代市のローズマリー紅茶店オーナー。50歳で大学院に再入学し、開発経済学を専攻。途上国の貧困削減のためフェアトレードを推進する。

ご感想お待ちしております！

info@uki-pre.net